



Title	林忠行著 『チェコスロヴァキア軍団：ある義勇軍をめぐる世界史』
Author(s)	天野, 尚樹
Citation	境界研究, 13, 179-186
Issue Date	2023-03-31
DOI	10.14943/jbr.13.179
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/90303">http://hdl.handle.net/2115/90303</a>
Type	bulletin (article)
File Information	010.pdf



[Instructions for use](#)

[ 書評論文 ]

## 林忠行著『チェコスロヴァキア軍団： ある義勇軍をめぐる世界史』\*

天野 尚樹

はじめに

本書は、チェコスロヴァキア軍団の歴史である。チェコスロヴァキア人という民族創出の歴史であり、チェコスロヴァキア国家の独立の歴史でもある。また、オーストリア＝ハンガリー二重君主国の解体の歴史であり、その過程での帝国臣民間の内戦の歴史であり、帝国臣民だったチェコ人・スロヴァキア人同胞同士の内戦の歴史でもある。さらに、1917年10月革命後、軍団が契機となって勃発し、日本を含む連合国が干渉することによって国際化したシベリア・極東でのロシア内戦の歴史でもある。そして、第一次世界大戦が戦われ、帝国主義が終焉し、民族自決に基づく新国際秩序へと移行する世紀転換の歴史でもある。

「20世紀という時代は、残念なことではあるが、世界戦争と内戦の時代」（5頁）であり、その内戦が国際化することが現代紛争の特徴であるという著者の歴史観は正鵠を射ていよう。そのはじまりであるチェコスロヴァキア軍団の歴史には20世紀が凝縮されている。

チェコスロヴァキア軍団(以下、軍団)とは、オーストリア＝ハンガリー出身のチェコ系・スロヴァキア系ロシア移民で、第一次大戦勃発後にロシア帝国軍に志願した義勇兵集団をその起源とする。ロシアが大戦から離脱すると軍団は、連合国フランス軍の統帥下におかれロシア内戦を戦う。1918年10月のチェコスロヴァキア独立宣言後も内戦にとどまり続け、新生国家への「帰国」が完了するのは独立から二年以上たった1920年11月のことである。

本稿は以下、まず本書の構成と内容を紹介し、次いでその特長を抽出した後、軍団のロシア内戦への関与の理由をめぐる議論について検討する。

### 1. 構成と内容

本書は以下の通り構成されている。

---

\* 林忠行著『チェコスロヴァキア軍団：ある義勇軍をめぐる世界史』岩波書店、2021年。

プロローグ 無名戦士の墓をめぐって

序章 「祖国」のかたち：その土地と住民

第1章 義勇兵たち：ガリツィアの前線へ

第2章 独立運動 1914-16年：未来の祖国を想像する

第3章 ロシア革命と軍団 1917年：ズボロフの勝利、そして東方へ

第4章 反乱 1918年：シベリア横断鉄道をめぐって

第5章 干渉戦争と新国家の独立：「連合国の前衛」に

終章 独立後の軍団：故郷への道は遠く

エピローグ その後の軍団員たち

序章では、軍団史を「補助線にして、ロシア革命史と内戦史、ハプスブルク君主国の解体とその領域の国際関係の再編という複数の大きな物語が、世界大戦によってどのようにつながっていたのか」(4頁)という問題意識が提示される。

第1章は、第一次世界大戦勃発から二ヵ月半後の1914年10月にキエフで、軍団の前身であるロシア帝国公認義勇軍「チェコ・ドルジナ」が創設された経緯と、ガリツィアでの義勇軍の緒戦が紹介される。両地とも現在はウクライナに帰属するが、当時のロシア帝国領キエフはチェコ系ロシア移民の拠点であり、ガリツィアはオーストリア領だった。

第2章では、国内外で展開されたチェコ人独立運動の系譜が論じられる。特に、ロシア帝国を盟主とする連邦国家の構成主体として、ボヘミア諸邦とスロヴァキアを合わせた領域国家の建設を目指すという、後のチェコスロヴァキア独立国家の思想的萌芽を提示したカレル・クラマーシュの「スラヴ帝国」論に焦点が当てられる。

第3章は、ロシア革命とチェコスロヴァキア独立運動および軍団との関係に光を当てる。論点は三つ。第一に、トーマシュ・マサリクへの独立運動の主導権の移行、第二に、軍団の活躍で神話化される「ズボロフの戦い」の実相、第三に、遠くフランスを終着点として、ロシアを横断し出港地ウラジオストクを目指す軍団のアナバシス(大移動)の開始である。

第4章では、軍団による1918年5月の「反乱」とロシア内戦への突入の過程が再構成される。東方への移動を妨害するソヴィエト勢力に対して軍団は、ペンザ、チェリャビンスク、ノヴォニコラエフスク(現ノヴォシビルスク)を拠点に軍事行動を起こす。現地反ソヴィエト勢力が軍団と共闘し、ロシアは体制選択をめぐる内戦に突入する。

第5章はスケールを拡大し、ロシア内戦の国際化とチェコスロヴァキア独立をめぐる国際政治を軍団史と接続する。ロシアに東部戦線を再構築するために軍団を活用したい英仏と、それとは異なる思惑で内戦に干渉する日米のはざまに現場の軍団は翻弄されるが、他方、国際政治の場ではエドワード・ベネシュが軍団カードを活用して連合国からの独立支持を勝ち取り、1918年10月28日、チェコスロヴァキアは独立を宣言する。

終章は、ロシア内戦からの軍団の撤退過程を叙述する。当初は軍団が席卷したロシア内戦も、独立宣言前後の時期からソヴィエト赤軍が優位に立つ。1919年9月ようやく撤退命令が軍団に出された。しかし、継続する国際内戦の舞台そのものであるシベリア鉄道での移動は困難を極め、最後の部隊がウラジオストクから出港し、プラハへの帰還が完了するまでにはさらに一年以上を要した。帰還した軍団員は7万2644名、ロシアで3652名が戦死し、739名が行方不明となった。

## 2. 特長

歴史学は、叙述と論証という両輪からなる営みである。両者のバランスのとり方が歴史書の性格を決める。本書はまずもって歴史叙述である。煩瑣な論証の手続きが物語の進行を妨げることはない。著者自身も「あとがき」で、「歴史に関心をもつ広い読者を想定し」、個々の「事実発見」より、わかりやすい物語の叙述を重視したと述べている。たしかに本書はわかりやすい。しかし、さまざまな事象がマルチスケールで複合する軍団をめぐる世界史を「わかりやすく」叙述することは至難の業である。それを可能にしたのは、1978年に最初の論文<sup>(1)</sup>を発表して以来の実証研究の蓄積と、視野の広さを確保する国際政治学や比較政治学のディシプリンの確かさであろう。その意味で、わかりやすい歴史叙述としての本書の成功は、同時にきわめて高度な学術的成果でもある。

本書では、同時代資料や、旧チェコスロヴァキア時代の研究、最新の研究成果が縦横に使われているが、それらの史資料についての詳しい紹介はされていない。それは、歴史叙述を優先する著者自身の選択ではあろう。しかしやはり、特に重要な史資料や研究者、あるいはチェコやスロヴァキアでの研究動向について、物語の進行を妨げない注などで紹介や評価があってもよかつたのではないか。そうすれば本書の学術的意義が明確になるだけでなく、「プロローグ」で若干触れられてはいるものの、今日のチェコとスロヴァキアでの軍団の位置づけがよりみえやすくなったであろうと思われる。

歴史叙述上の特長として特筆すべきは場面構成の妙である。軍団、チェコスロヴァキア、オーストリア＝ハンガリー、ロシア、アメリカ、北東アジア、ヨーロッパというミクロからマクロまで異なるスケールの歴史をリンクさせながら物語は展開する。マルチスケールの全体像を同時代において描き出すために本書は、ミクロからマクロへとスケールを拡大しつつ、各スケールの場面間をカットバック(切り返し)式に接続させている。

たとえば第1章では第1節が、チェコ人移民の拠点であったキエフでの軍団編成、第2節が、ガリツィアをはじめとする東部戦線への出兵、第3節が、ロシア帝国のセルビア義勇兵、フランスとセルビアでのチェコ人・スロヴァキア人義勇軍の編成へとスケールが広が

(1) 林忠行「チェコスロヴァキア独立運動：エドヴァルド・ベネシュの活動をめぐって」『東欧史研究』1号、1978年、136-150頁。

っていく。また、軍団史の中心となる18年5月反乱前後の状況については、章単位でスケールチェンジがおこなわれる。すなわち第4章では、ウラル・シベリアというローカルでの軍団の動きが叙述され、第5章で、そのローカルな動きに、連合国の干渉や独立支持獲得のための外交交渉という国際政治が連繫される。

副題の「ある義勇軍をめぐる世界史」というマルチスケールな課題はこのように、ミクロスケールから出発して、カットバック式にスケールチェンジをおこないながら、グローバルなスケールまで見通すという映画的編集手法によって達成されている。さらに、話がマクロスケールまで広がり切った章末で、サマセット・モーム、カレル・チャペック、ヤロスラフ・ハシェク、アルフォンス・ムハ(ミュシャ)、ルドヴィーク・スヴォボダという魅力的な個人史がコラムとして接続されるという構成も絶妙である。

ただし、カットバック式構成の常として、節や章ごとに時間軸が前後し、読書に混乱が生じることがままあるのは否めない。たしかに著者は、物語の軸となる事象については労をいとわずパートごとに繰り返し説明して読者の理解に配慮しているが、やはり時系列がひと目で分かる年表が用意されていてほしかったと思う。

### 3. 議論：反乱の理由をめぐる

評者は、ロシア極東近現代史を専門としており、チェコやスロヴァキアをはじめとする諸外国での軍団史研究の動向については不案内だが、ロシアでは近年、研究史上画期的な成果があった。二巻本資料集『チェコ＝スロヴァキア(チェコスロヴァキア)軍団 1914-1920』の刊行である。軍団の100周年を期して2013年に1914-1917年について、2018年に1918-1920年についての文書群が出版された<sup>(2)</sup>。両巻とも1000頁を超える大冊である。ロシア国立軍事文書館(РГВА)が中心となり、ロシアの国立文書館五館とチェコ共和国国防省軍事史文書館(VÚA-VHA Praha)が協力して編纂された。もちろん本書でも参照されている。

本資料集に収録されている文書群には、既存の公刊資料集から集め直されたものも目立つが、未公刊史料も少なくない。チェコ語やフランス語などロシア語以外の史料はロシア語に翻訳されている。本資料集が初公刊だと特に強調するのは、1920年3月1日、撤退にあたってソヴィエト軍に軍団が引き渡した金塊の行方に関する文書群である。ロシア帝国の金準備として保有されていたのを反ソヴィエト派が確保したもので、一部が日本に渡ったとされる説もあり、読書界でも関心が高い<sup>(3)</sup>。

ただし、資料集第二巻に収録されている金塊関連の文書群は、ニジネウディンスクか

(2) Чешско-словацкий (Чехословацкий) корпус. 1914–1920. Документы и материалы. Т. 1. Чешско-словацкие воинские формирования в России. 1914–1917 гг. (Москва: Новалис, 2013); Т. 2. Чехословацкие легионы и Гражданская война в России. 1918–1920 гг. (Москва: Кучково поле, 2018).

(3) 白鳥正明『シベリア出兵90年と金塊疑惑(ユーラシア・ブックレット141)』東洋書店、2009年；上杉一紀『ロマノフの消えた金塊』東洋書店新社、2019年、など。

ら、約500キロメートル東に位置する引き渡し場所のイルクーツクへ鉄道輸送する途中で、総計約335トンの金塊のうち13箱(約639キログラム)が軍団員の警備下で紛失したという事件に関するものである<sup>(4)</sup>。文書原本は、ロシア国立経済文書館(РГАЭ)が所蔵している。たしかに興味深い事件ではあるが、軍団がソヴィエト軍に引き渡したという、本書でも紹介されている通説に根本的な変更を迫るものではない。

さて、軍団史をめぐる最重要の論点のひとつが、軍団がなぜ1918年5月反乱を起こし、ロシア内戦の引き金を引いたのかという点であることは論を俟つまい。この点について本資料集が提示する歴史像は連合国、とりわけフランスの政治的指導の影響が大きいというものである<sup>(5)</sup>。

たとえば1918年3月、キエフに集まっていた軍団をフランスに移送するにあたって、はるかに距離が近いアルハンゲリスク経由の北方ルートではなく、ウラジオストクを経由する東方ルートをとるようにとマサリクに命令したという、在露フランス軍使節団長アンリ・ニーセルのジョルジュ・クレマンソー仏首相宛て暗号電報が収録されている。ニーセルによれば、ドイツが要求する停戦条件との絡みが命令の背景にあった<sup>(6)</sup>。アナバシスの移動ルート選択の決定過程に言及している文書はこの一件だけである。

ちなみに、この移動ルートの決定過程について本書ではなぜか言及がない<sup>(7)</sup>。移動の過程で反乱が起きたことを重視するチェコスロヴァキア独立運動史の立場からすれば、北方ではなく東方を選択したこと自体に重きはおかれぬかもしれない。しかし、評者に関心をもつ対ソ干渉戦争史の立場からすれば、軍団がそもそも東に来なかったならばシベリア・ロシア極東での内戦も干渉もなかったかもしれず、なぜ東方ルートを選んだのかという問題は重要である。原暉之がかつて指摘した、北方ルートから東方ルートへという選択は「重大な変更であり、しかも重大である割には変更の根拠が薄弱である」<sup>(8)</sup>という疑問は解消されていない。

さて、ロシアでの軍団の行動がフランスの指示によるものだというのは、軍団がフランスの統帥権下にあったことを考えれば、一見、合理的な説にも思える。しかし、フランス要因を強調する歴史観は、じつはソ連時代の歴史観を引きずったものである<sup>(9)</sup>。英仏主導

(4) Чешско-словацкий (Чехословацкий) корпус. Т. 2. Док. 455, 461, 466, 467, 483, 495, 508, 512. С. 725–831.

(5) Там же. Краткое археографическое предисловие. С. 32.

(6) Там же. Док. 14. С. 52–53.

(7) 前著では、次のように言及されている。「とりあえず混乱した情勢にあるウクライナから撤収することは差し迫った問題だった。マサリクはひとまず、ロシアでの赤軍の強化を鑑みて、ソヴィエト勢力のまだ弱いシベリアを経由してウラジオストクに出ることを前提にして、東方に軍団を移動させる決定をおこなった」。林忠行『中欧の分裂と統合』中公新書、1993年、178頁。

(8) 原暉之『シベリア出兵：革命と干渉 1917–1922』筑摩書房、1989年、326頁。

(9) Victor M. Fic, *The Bolsheviks and the Czechoslovak Legion: The Origin of their Armed Conflict March-May 1918* (New Delhi: Abhinav Publications, 1978), pp. 347–349.

の連合国による反ソヴィエト政策に軍団が利用されたというイデオロギー色を薄めただけで、ソヴィエト史学と現代ロシア史学の基本的認識は連続している。

これに対して著者は、軍団の行動理由を次のように説明している。「軍団を赤軍に取り込もうとするトロツキーたちの無理な圧力と、軍団を対ソ干渉に利用しようとする連合国の一貫性を欠いた行動、軍団の合議制からくる集団心理、そして若い指揮官たちの無定見な行動が重なった結果として反乱は起きた」(238-239頁)。要因はひとつではなく、複合的な契機が相関して反乱が発生し、ロシア内戦が引き起こされたという認識はひとまず妥当なものといえよう。

著者の評価で特徴的なのはトロツキー要因の強調である。他の箇所でも、軍団員たちを赤軍もしくは労働部隊として取り込もうとする「強いこだわり」がトロツキーにはあり(136頁)、また、1918年5月25日、地元ソヴィエト当局に対し軍団員を武装解除させるようトロツキーが強く命じたことが、軍団の武装蜂起の決定的契機となった(151頁)とも言及されている。

ただ、このトロツキー要因については史料的根拠が盤石とまではいえない。注をみるとわかるように、トロツキー要因を強調する見解には、カナダのブラウン大学で教鞭をとり、インド・東南アジア研究者としても著名なチェコ出身の故ヴィクター・フィクの影響がみられる。チェコスロヴァキア史研究におけるフィクの主著『ボリシェヴィキとチェコスロヴァキア軍団：1918年3月-5月武力紛争の根源』(1978年刊)は、連合国の指導性、および軍団と地元反ソヴィエト勢力との共謀を強調するソヴィエト史学を批判して、トロツキーの主導的役割を強く打ち出している。ただし、同時代の新聞資料などに多く依拠するフィクの論述において、トロツキーの主導性を記述する箇所については史料的根拠が必ずしも明確ではない<sup>(10)</sup>。説得的な歴史像が提示されてはいるものの、事実認定については一定の留保が必要だと考える。

五月反乱の理由に関して本書が、直接批判の遡上に載せているのが原暉之の説である。原は、1989年刊の著書『シベリア出兵：革命と干渉 1917-1922』において、軍団及び「武装独塊俘虜」についてそれぞれ一章を割いている。「武装独塊俘虜」とは、ロシア帝国軍の捕虜となったドイツ軍・オーストリア＝ハンガリー軍の将兵で、ソヴィエト派に共感して赤軍に加わったいわゆる「国際主義者(インテルナツィオナリスト)」を指す。

この「武装独塊俘虜」については、その数を過大に見積もって脅威を煽り、派遣軍の兵力拡大の根拠にしようとした情報操作した日本の政府と参謀本部による政治的神話化への批判が原の歴史認識の根幹にある<sup>(11)</sup>。これに対して著者は、数が過大に見積もられていたことは確かだが、実戦経験に乏しいソヴィエト軍にあつて経験豊富な独塊軍人の存在感は、内戦

(10) Ibid., pp. 224-272.

(11) 原暉之『シベリア出兵』310-313頁。

の現場で対峙する軍団員にとって相当リアルなものだったはずだと批判する(168頁)。この批判は妥当なものといえよう。

一方、五月反乱については原は、著者のいう「若い指揮官たちの無定見な行動」、とりわけノヴォニコラエフスクでの反乱を指揮したラドラ・ガイダの「冒険主義」と、地元反ソヴィエト勢力と軍団の計画的協力関係が反乱を引き起こしたと主張する<sup>(12)</sup>。この見解には、ピョートル・パルフェノフの著書『シベリアにおける内戦 1918–1920』(1924年刊)をはじめとするソヴィエト史学の影響みられる<sup>(13)</sup>。

これに対して著者は、原の主張を指して、「ガイダらが〔ノヴォニコラエフスクの反ソ派リーダーの〕グリシン＝アルマーゾフらと「親密な関係」にあったという見解もあるが、むしろ、ガイダらの行動計画とこれらの反ソヴィエト派による蜂起の準備が並行して進んでいたということなのかもしれない」(159頁)と、断定は避けつつも、計画的共謀は否定する立場をとっている。この点についてはフィクも、地元反ソヴィエト派と軍団とのあいだに個人的接触はあったものの、5月25日の反乱発生以前に正式な協力関係が両者に存在したわけではないと主張している<sup>(14)</sup>。

「若い指揮官たち」の「冒険主義」は重要なファクターではあるものの、それを突出した要因とみなす評価には一定の留保が必要だろう。しかし、著者の説も、ガイダらと地元反ソヴィエトグループの計画的協力関係を根本的に否定するだけの根拠があるわけではない。ロシア内戦期に関する文書館史料はロシアの地方文書館でも開示が進んでおり、今後の解明を待ちたい。

## おわりに

最後に一点だけ、記述の内容に疑問を呈しておきたい。1918年3月15日、ウラジオストクを経由してフランスへ渡航することについて、国民評議会ロシア支部のイジー・クレツァンダが「スターリンから承認」を得たと記されている(117頁)。しかし、この交渉の議事録によれば、スターリンがその場にいたことには疑問符が付されており、クレツァンダへの承認はレーニンが電話で伝えたと記録されている<sup>(15)</sup>。検証が必要であろう。

本書は、著者の研究キャリアを知る者からすれば、ついに出た、という待望の書である。そのおもしろさは読者の期待を裏切ることはない。チェコスロヴァキア軍団という魅力的な対象の歴史自体に加え、ミクロなスケールからグローバルなスケールを見通す視野の広さと、それをひとつの全体像として描き出す歴史叙述には、学生から研究者、あるいは

(12) 同上、331–333頁。

(13) П.С. Парфенов, Гражданская война в Сибири 1918–1920 (Москва: Государственное издательство, 1924). С. 19; Fic, *The Bolsheviks and the Czechoslovak Legion*, pp. 350–351.

(14) Ibid., p. 510.

(15) Чешско-словацкий (Чехословацкий) корпус. Т. 2. Док. 25. С. 71.



はいまだ暗中模索の観のある高校の歴史総合に携わる者にとっても、ひとつのモデルとして大いに学びがあること請け合いである。